

沖縄ん 建築紀伝

横断する眼差し

■10回■ 国場幸房(建築家)

夢への挑戦・沖縄美ら海水族館

沖縄美ら海水族館の新たな挑戦

基本計画は、実施設計の段階までにまだ平面計画で煮詰めるべき箇所があり、約一ヶ月でその変更を認めてもらった。魚の水処理に関しては経験豊富な(株)環境設計事務所がJ.Vで協力してくれていたので安心だった。国建のスタッフは飼育世界を知るために旧水族館での体験学習をすることも出来た。その他本土の大規模な主なる水族館教箇所と、外国のホンコン・シンガポール・ジャカルタ・オーストラリア等十ヶ所程の代表的な水族館を見学させてもらった。ときには発注者側・飼育運営する側も同行し、食事をした後の酒の席でお互いのこの計画への夢を語りあった。私自身はこれら多くの水族館を見せてもらいながら出来るだけこれらの施設に無い新しい物を創る事を心がけていた。例えば、とくに大水槽で、要求されていた水中トンネルをアクアルームとして設計変更したり、シアタールームのスクリーン面を水槽に向けたり、観音の動線と期待感の演出を考えた、

大勢の観客が歩きながら、座って休息とりながら、又は飲食しながら同時に大水槽を觀賞出来る空間をイメージした。沖縄の眩しい太陽の光を大水槽の上のブラインドを開閉して、差し込む光を動かすことで神秘的な演出を期待するような仕掛けを設置するなど考慮した。又多くの人が集う入り口付近には沖縄の気候にはどうしても必要と考えて大きなパーゴラ空間を設計に取り入れた。そしてその空間から眺める沖縄の海の変化するコバルト色の海の色を美しく、背景に伊江島をとりいれることで、より効果的に見せてくれることを期待した。



ゲートからの眺望

世界最大の魚類であるジンベエザメを一枚の大きなパネルを通して見たいという気持ちは観客を含め、皆の希望であるはずだと直感した。しかしこれまでの基本計画の報告書には四本の補柱つけることに度重なる会議で決定されていた。実施設計に至るにあたって、この件についての未練が捨てがたく各メーカーの技術者と直接会って教度話をきくことにした。其のなかで日プラの職人的技術者でもある敷山社長の話を聞く機会を得た。氏は沖縄海洋博で旧水族館の水槽パネルを施工されていて、その独自の技

術を生かして、その後世界中の数多くの水族館を日本の技術として採用され独自性を発揮されていた。氏からパネルを現場溶接し一枚につなぐことで、補柱が取り除ける技術があることを聞き工事中である鹿児島島の水族館の溶接現場を見せてもらった。可能性が見えたのでどうしてもそれを実現したくなった。今回の水槽は、開口部・縦七・五びである。水深の一〇び水圧を加えると、試算で厚さ六〇センチになるといふ。此れまでの世界記録の厚さは三六センチなので、開口部・巾・縦・厚さとも群を抜いた世界一の大きさである。それを実現することは勿論設計者の望むところであり皆もそれを期待するものと信じた。職人敷山氏にとっても表現出来る可能性と挑戦するに値するものと魅力を感じていた。それを実現させるためのお願することになり、当時の国営沖縄記念公園事務局長であった西川嘉輝氏に英断をいだけたのはありがたかった。又、それは基本構想に携わった方々から受け継いだ夢の実現への、数多くの解答の中の一つに成り得るとも思え、水族館をみよきた多くの観客にも大きな喜びと話題性になりえると思えたからである。

そのことも、会議の後での酒の席で、発注者側の西川所長やそのスタッフ、飼育側の内田館長やそのスタッフを交えての、雑くばらんに、互いのこの計画に対する意気込みと夢を語り合っていたことが幸いしたのだと思う。

勿論予算を増やすことは出来ないで側面の補柱を増やしアクリルの厚さを薄くするなど、いろいろ工夫して前面のアクリルの予算を生み出すことが出来た。最後の不安があったが、厳しい予算の中で敷山氏の日プラがそれを請負、

その大パネルを施工完成させた。技術者の職能と誇りの世界を感じて有り難く思えた。



世界最大のアクリルガラス
(幅 22.5m、高さ 8.2m、厚さ 60cm)

物を創造する世界において、公のフォーマルな会議には利点と欠点があると思う。欠点の要素に、無難にはまとまるが、とくに多数の会議だとなかなか新しい挑戦には至らないことが多いように思うからである。



水槽を底から見上げるアクアルーム